

クリの大苗育苗による早期成園化
第1報 種子, 台木別による台木, 苗木の生育比較

藤丸 治（熊本県農業研究センター球磨農業研究所）

Osamu FUJIMARU:

Early Bearing Mature Orchard Culture Method by Raising Nursery Stock in Japanese Chestnuts

1. Comparison Growth of Rootstock and Nursery Stock by Seeds and Rootstock

熊本県球磨地方のクリは、樹の老木化や相次ぐ気象災害の影響などのため収量が伸び悩んでいる。その対策として、園地の若返りを図るため改植、補植を推進しているが、通常の苗木では成園並みの収量を上げるまでに時間がかかる。そのため、大苗を植栽する事により初期収量を確保し、改植に伴う減収期間を短くする必要がある。大苗育苗を行うためには優良な台木が必要となるが、種子による台木の生育差を確認するため、種子を階級別、比重別に分け、台木の生育比較を行った。また、台木を基部径別に分けて苗木の生育を比較調査した。

1. 材料および方法

試験1：台木用の種子は‘筑波’の果実を用い、階級別に4段階（M, L, 2L, 3L）、比重別に4段階（比重1.03, 1.05, 1.07, 1.09）に分け、播種までの貯蔵中の腐敗果率および台木の基部径の比較を行った。貯蔵中の腐敗果率は各区150果以上を調査し、そのうち健全果を各区40果播種して台木の生育を比較した。

試験2：‘筑波’の実生台木の基部径を、10～11, 12～14, 16mm以上の3段階に分け、各区20本の台木に‘筑波’の穂木を接ぎ木して、苗木の基部径、高さ、副梢の本数、副梢長を比較した。

2. 結果および考察

1) 台木用種子の検討

種子の貯蔵中の腐敗果率は、階級別ではほとんど差はなく10%以下であったが、比重別では1.03の腐敗果率が28.8%と高くなった（第1図）。このことから、貯蔵中の種子のロスを考えると、比重が低い果実は取り除いた方が良いと考えられる。

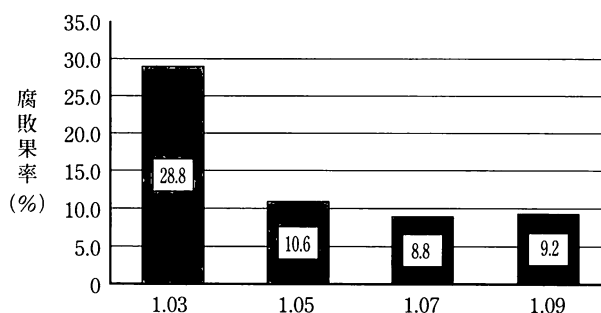
2) 台木の生育比較

台木の基部径は、やや大玉の3L果で太い傾向があったが大きな差はなく（第2図）、特に健全果であれば小玉果を播種しても問題はないと考えられる。また、比重別では1.05の種子で台木の生育がやや良かったが、基部径14mm以上の台木の比率には大きな差はなく、また比重が低くてもある程度の台木を確保できたため（第3図）、播種後の台木の生育には種子の影響は少ないと考えられる。

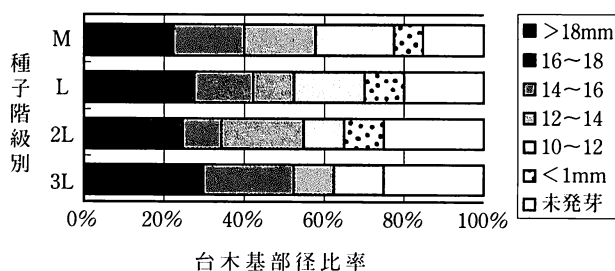
3) 台木基部径別の苗木の生育比較

台木の基部径別の苗木の生育比較では、台木の接ぎ木部が太いほど苗木の基部径は太く、副梢本数が多くなった（第1表）。このことから、生育の良い苗木を確保するには、接ぎ木部の直径が太い台木に接ぎ木するほうが良いことが分かった。

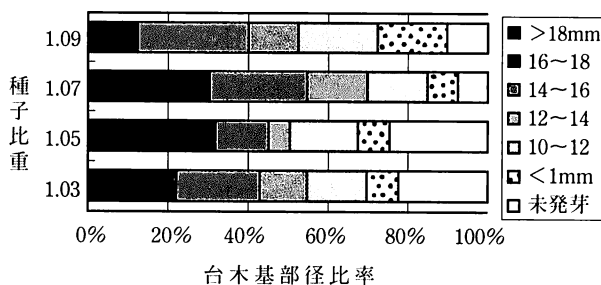
また、大苗を育成するためには、太い台木をそろえて接ぎ木をすることで、効率よく副梢を利用した大苗を育成することができると考えられる。



第1図 果実比重別の貯蔵中の腐敗果率



第2図 種子階級別の台木基部径比較



第3図 種子比重別の台木基部径比較

第1表 台木基部径別の苗木の生育比較

接ぎ木時の 台木基部径	苗木の生育			
	基部径	高さ	副梢本数	副梢長
(mm)	(mm)	(cm)		(cm)
10～11	16.6	142.3	1.5	59.6
12～14	18.1	156.9	2.2	66.7
16以上	21.7	165.3	2.7	68.8

注) 副梢：基部径5mm以上、高さ：接ぎ木部からの高さ